最新

唱歌教科書

附伴奏

內閣圖書

明けゆく空

（瑞典民謠）

Allegretto

アケユーク ヒガシノ ミソラヲ ッ
まばゆーき みひかり あめつち そ

ノテイマシーモ ノボレル アサヒヲ アフ(オ)ゲテ
めていましーも のぼれる あさひを あふ(オ)げて

ルヒノ ヒカリヲ ッノミニ アビテゾ コ
るひの めぐみを そのみに あびてぞ こ

ノヨーノ モノミナ イキテシサカユテ
のよーの ものみな いきてしさかゆ

若日

（瑞典民謠）

Moderato

ハナヲミレバオモフー スヤ
あそびなれしこやま ここ

シーワカキッノヒ ッキヲミレバオモフー ムッビ
ろーあるかなれも ともにあびしをがは しのぶ

シームカシノトモ イロカハカヘセズ ッノハナサ
かーなれもむかし かのをか そのたに ながめは か

ケドモヒカリハカハラズ ッキカゲスメドモ
はらず かのはし このもり すがたはそのまま

○秋景色　犬童球淡

一、吹く風も心地よく　小田の穂波立たせ
村人の喜びを　雀近く跳り
鳥遠く歌ふ。

二、山々は紅葉して　綾や錦織れば
山柿も色づきて　眞玉峯に晒し
黄金谷にかざる。

三、茸狩りて歸るさの　人の群れの歌か
一叢の茂りたる森を越えて　しらべいとも妙に
うれし〳〵秋のながめ　うれしや。

○我住む里　犬童球淡

一、我住む里に　春たちぬれば
百草千草花咲き亂れ
かすめるみ空に　小鳥もうたふ
うき世に遠き山里嬉し。

二、我住む里に　秋立ちぬれば
葉末の露に蟲啼き交し
澄みゆく月かげ心を洗ふ
うき事知らぬ山里嬉し

○里の秋　八波則吉

秋風　さらさらさら
門田の稻葉を吹く
鳴るよ　鳴子が　けたたましく
案山子も　驚き顔。

○村の祭

一、黄金の穂波森によせて
浮き立つ村の祭日
里にひびく笛や太鼓
ぞめきぞめく賑ひ。

二、どどろく太鼓浦曲わたり
ふきなす笛のゆかしや
けふの祭うたへ祝へ
こがねみのるよき日を。

三、野山にごよむ宮の相撲
花火の音もいさましし
けふの祭うたへ祝へ
こがねみのるよき日を。

○歳暮　犬童球淡

一、あはれことしも夢とくらし
をしむ日數と早やもなりぬ。

二、過ぎしひと年かへり見れば
成しゝ事ごとあともなくて。

三、朽ちし軒ばに嵐すさび
老いの頭に雪ぞつもる。

○獵夫の歌　犬童球淡

一、分け行く山路　攀づる岩根
猿のごとき足の運び

ララ……
高き梢に鳥は歌ふ。

二、梢の鳥よ安く歌へ
望むは谷に住める獸類
ララ……
勇める犬の叫び聞ゆ。

三、勇める犬よ高く叫べ
手に執る銃の先きもふるふ
ララ……
出づるは何か來るは何か。

○明け行く空　犬童球淡

一、明け行く東のみ空をそめて
今しも昇れる旭を仰げ
照る日の光りを其の身に浴びてぞ
此世の萬物生きてし榮ゆ。

二、眩ゆきみ光り天地そめて
今しものぼれる旭を仰げ
照る日の恵を其の身に浴びてぞ
此世の萬物生きてし榮ゆ。

○若き日　犬童球淡

一、花を見れば思ふ　過ぎし若き其日
月を見れば思ふ　睦びし昔の友
色香はかへせず　その花咲けども
光りは變らず　月かげ澄めども。

二、遊びなれし小山　心ある汝も
共に浴びし小川　忍ぶか汝も昔
かの岡その谷　ながめは變らず
かの橋此の森　姿はそのまゝ。

○雪の夜　犬童球淡

雨戸をたゝく吹雪の音
燈火中に圍爐裏圍む
父は語る昔話　子等は聞けり耳を立てゝ
冬を知らぬ家の内に　昔語りの花ぞ咲く。

門に近かくもののひびき
松の枝や折れつらん
屋根の雪や落ちつらん。
ふしどに入りし子等はねむり
あたり靜かに夜はふけぬ
松吹く嵐　今はやみて
窓うつ風の音も絶えぬ。

○友を送る　八波則吉

一、行くか　友よ　汝ひとり
我等を置きて　遥けき旅へ
行くか　友よ　汝ひとり

二、行けや　友よ　いざさらば
汝が行く先に　幸こそ待てれ
行けや　友よ　いざさらば

○冬のあした　犬童球淡

一、しとねを離れて雨戸を繰れば

昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月十三日發行

定價金壹圓參拾錢

編纂者　若狹萬次郎

東京市小石川區八千代町四十二番地
發行兼印刷者　若狹萬次郎

東京市小石川區八千代町四十二番地
發行所　交響社出版部

不許複製